

# 常夏 渋谷栄一訳

## 第一章 玉鬘の物語 養父と養女の禁忌の恋物語

### 「第一段 六条院釣殿の納涼」

たいそう暑い日、東の釣殿にお出になつて涼みなさる。中将の君も伺候していらつしやる。親しい殿上人も大勢伺候して、西川から献上した鮎、近い川のいしぶしのような魚、御前で調理して差し上げる。いつもの大殿の公達、中将のおいでのなる所を尋ねて参上なされた。

「退屈で眠たかつたところだが、ちょうどよい時にいらつしやつたな」

とおつしやつて、御酒を召し上がり、氷水をお取り寄せになつて、水飯などを、それぞれにぎやかに召し上がる。

風はたいそう気持ちよく吹くが、日は長くて曇りない空が、西日になるころ、蝉の声などもたいそう苦しうに聞こえるので、

「水のほとりも役に立たない今日の暑さだね。失礼は許していただけようか」  
とおつしやつて、物に寄りかかつて横におなりになった。

「とてもこんな暑い時は、管弦の遊びなどもおもしろくなく、とはいえ、何もしないのもつらいことだ。宮仕えしている若い人々にはつらいことだらうよ。帯も解かないではね。せめてここではくつろいで、最近世間に起こつたことで、少し珍しく、眠気の覚めるようなことを、話してお聞かせください。何となく年寄じみた心地がして、世間のことも疎くなったのですね」  
などとおつしやるが、珍しい事と云つて、ちよつと申し上げるような話も思いつかないので、恐縮しているよついで、皆たいそう涼しい高欄に、背中を寄り掛けながら座つていらつしやる。

### 「第二段 近江君の噂」

「どうして聞いたことか、大臣が外腹の娘を捜し出して、大切になさつていと話してくれた人がいたので、本当ですか」

と、弁少将にお尋ねになると、

「仰々しく、そんなに言つほどのことではございませんでしたが。今年の春のころ、夢をお話をなさつたところ、ちうつと人伝てに聞いた女が、自分には聞いてもらつべき子細がある」と、名乗り出ましたのを、中将の朝臣が耳にして、  
「本当にそのように言つてよい証拠があるのか」と、尋ねてやりました。詳しい事情は、知ることができません。おつしやるように、最近珍しい噂話に、世間の人々もしているようでございます。このようなことは、父にとつて、自然と家の不面目となることでございます」

と申し上げる。やはり本當だつたのだとお思ひになつて、

「たいそう大勢の子たちなのに、列から離れたような後れた雁を、無理にお捜しになるのが、欲張りなのだ。とても子どもが少ないのに、そのようなかすき種を、見つけ出したいが、名乗り出るのも嫌な所と思つていられるでしょう、まったく聞きません。それにしても、無関係の娘ではあるまい。やたらあちらこちらと忍び歩きをなさつていたらしいうちに、底が清く澄んでいない水に宿る月は、曇らないようなことがどうしてあるつか」

と、ほほ笑んでおつしやる。中将君も、詳しくお聞きになつていられることなので、とても真面目な顔はできない。少将と藤侍とは、とてもつらいと思つていた。

「朝臣よ。せめてそのような落し胤でももらつたらどうだね。体裁の悪い評判を残すよりは、同じ姉妹と結婚して我慢するが、何の悪いことがあるつか」  
と、おからかいになるようである。このようなこととなると、表面はたいそう仲の良いお二方が、やはり昔からそれでもしつくりしないところがあるものであった。その上、中将をひどく恥ずかしい目にあわせて、嘆かせたいらつしやるつらさを腹に据えかねて、悔しいとでも、人伝てに聞きなさらうとよい」と、お思ひになるのだった。

このようにお聞きになるにつけても、

「対の姫君を見せたよくな時、また軽々しく扱われるよくなことはあるまい。たいそうはつきりとしていて、けじめをつけるところがある人で、善悪の区別も、はつきりと誉めたり、また貶しめ軽んじたりすることも、人一倍の大臣なので、どんなに腹立たしく思うであろう。予想もしない形で、この対の姫君を見せたらば、軽く扱うことはできまい。まこと油断なくお世話しよう」などとお思いになる。

「第三段 源氏、玉鬘を訪う」

夕方らしくなつて吹く風、たいそう涼しくて、帰るのももの憂く若い人々は思つていた。

「氣楽にくつろいで涼んではどうか。だんだんこのような若い人々の中で、嫌われる年になつてしまつたなあ」

と言つて、西の対にお渡りになるので、公達、皆お送りにお供なさる。

黄昏時の薄暗い時に、同じ直衣姿なので、誰とも区別がつかないので、大臣は姫君に、

「もつ少し外へお出になりなさい」

と言つて、「つっそり」と

「少将や、侍従などを連れて参りました。ひどく飛んで来たいほどに思つていたのを、中将が、まこと真面目一方の人なので、連れて来なかつたのは、思いやりがないようでした。

この人々は、皆気がないでもない。つまらない身分の女でさえ、深窓に養われている間は、身分相応に気を引かれるものらしいから、わが家の評判は内幕のくだくだしい割には、たいそう実際以上に、大げさに言つたり思つたりしているようです。他にも女性方々がいらつしやるのですが、やはり男性が恋をしかけるには相応しくくない。

こうしていらつしやるのは、何とかそのような男性の気持ちの、深さ浅さを見たいなどと、退屈のあまり願つていたのだが、望みの叶う気がしました」

などと、ひそひそと申し上げなさる。

お庭先には、雑多な前栽などは植えさせなさらず、撫子の花を美しく整

えた、唐撫子、大和撫子の、垣をたいそうやさしい感じに造つて、その咲き乱れている夕映え、たいそう美しく見える。皆、立ち寄つて、思いのままに手折ることができないのを、残念に思つて佇んでいる。

「教養のある人たちだな。心づかいなども、それぞれに立派なものだ。右の中将は、さらにもう少し落ち着いていて、こちらが恥ずかしくなる感じがします。どうですか、お便り申して来ますか。体裁悪く、突き放しなさいますな」

などとおつしやる。

中将君は、この優れた人たちの中でも、際立つて優美でいらつしやつた。中将をお嫌いなさるとは、内大臣は困つたものだ。ご一族ばかりで繁栄している中で、皇孫の血筋を引くので、見にくいとでもいうのか」

とおつしやる。

「来てくだされば、という人もございましたものを」

と申し上げなさる。

「いや、そんな大事に持てなされることは望んでいません。ただ、幼い者同士が契り合つた胸の思いが晴れないまま、長い年月、仲を裂いていらつしやつた大臣のやりかたがひどいのです。まだ身分が低い、外聞が悪いとお思いならば、知らない顔で、こちらに任せて下されたとしても、何の心配がありませんようか」

などと、不平をおつしやる。では、このようなお心のしっくりいつてないお間柄だったのだわ」とお聞きになるにつけても、親に知つていただけるのがいつか分からないのは、しみじみと悲しく胸の塞がる思いがなさる。

「第四段 源氏、玉鬘と和琴について語る」

月もないころなので、燈籠に明りを入れた。

「やはり、近すぎて暑苦しいな。篝火がよいなあ」

とおつしやつて、人を呼んで、

「篝火の台を一つ、こちらに」

とお取り寄せになる。美しい和琴があるのを、引き寄せなさつて、掻き鳴らしなされると、律の調子にたいそうよく整えられていた。音色もとても

よく出るので、少しお弾きになつて、

「このよつなことはお好きでない方面かと、今まで大したことはないと思ひ申していました。秋の夜の、月の光が涼しいころ、奥深い所ではなくて、虫の声に合わせて弾いたりするのは、親しみのあるはなやかな感じのする楽器です。改まつた演奏は、役割がしっかり決まりませぬね。」

この楽器は、そのまま多くの楽器の音色や、調子を備えているところが優れた点です。大和琴と言つて一見大したことのないように見えながら、極めて精巧に作られているものです。広く外国の学芸を習わない女性のための楽器と思われませぬ。

同じ習うなら、気をつけて他の楽器に合わせてお習いなさい。難しい手と言つても、特にあるわけではありませんが、また本当に弾きこなすことは難しいのでしょうか、現在では、あの内大臣に並ぶ人はいません。

ただちよつとした同じ管掻き一つの音色に、あらゆる楽器の音色が、含まれていて、何とも形容のしようがないほど、響き渡るのです。」

とご説明なさると、多少会得して、せひともさらに上手になりたいとお思ひのことなので、もっと聞きたくて、

「こちらで、適当な管弦のお遊びがあります折などに、聞くことができましようか。賤しい田舎者の中でも、習う者が大勢おりますと言つことですから、総じて気楽に弾けるものかと存じておりました。では、お上手な方は、まるで違つて居るのでしょうか。」

と、さも聞きたそうに、熱心に気を入れていらつしやるので、  
「そうです。東琴と言つて名前は低そうに聞こえますが、御前での管弦の御遊にも、まず第一に書司をお召しになるのは、異国はいざ知らず、わが国では和琴を楽器の第一としたのでしよう。」

そうした中でも、その第一人者である父親から直接習ひ取つたら、格別でしょう。こちらにも、何かの機会にはおいでになるだろうが、和琴に、秘手を惜しまず、隠さず演奏するようなことはめつたにないでしょう。物の名人は、どの道の人でも気安くは手の内を見せないものによつてです。

とは言つても、いずれはお聞きになれることでしょう。」  
とおつしやつて、楽曲を少しお弾きになる。和琴を弾く姿はとても素晴らしく、はなやかで趣がある。これよりも優れた音色が出るのだろうか」と、

親にお会いしたい気持ちが加わつて、和琴のことにつけてまでも、いつになつたら、こんなふうにくつろいでお弾きになるところを聞くことができるのだろうか」などと、思つていらつしやつた。

「貫河の瀬々の柔らかな手枕」と、たいそう優しくお謡いになる。「親が遠ざける夫」というところは、少しお笑いになりながら、「ことさらにでもなくお弾きになる管掻きの音、何とも言いようがなく美しく聞こえる。」

「さあ、お弾きなさい。芸事は人前を恥ずかしがつてはいけません。」想夫恋」だけは、心中に秘めて、弾かない人があつたようだが、遠慮なく、誰彼となく合奏したほうがよいのです。」

と、しきりにお勧めになるが、あの辺鄙な田舎で、何やら京人と名乗つた皇孫筋の老女がお教え申したので、誤りもあるうかと遠慮して、手をお触れにならない。

「少しの間でもお弾きになつてほしい。覚えることができるかも知れない」と聞きたくてたまらず、この和琴の事のために、お側近くにいきり寄つて、

「どのような風が吹き加わつて、このような素晴らしい響きが出るのかしら」と言つて、耳を傾けていらつしやる様子、燈の光に映えてたいそうかわいらしげである。お笑いになつて、

「耳聴いあなたのためには、身にしむ風も吹き加わるのでしよう。」  
と言つて、和琴を押しやりなさる。何とも迷惑なことである。

「第五段 源氏、玉鬘と和歌を唱和」

女房たちが近くに伺候しているので、いつもの冗談も申し上げなさらずに、

「撫子を十分に鑑賞もせず、あの人たちは立ち去つてしまつたな。何とかして、内大臣にも、この花園をお見せ申したいものだ。人の命はいつまでも続くものでないと思つと、昔も、何かの時に話したことが、まるで昨日今日のこのように思われませぬ。」

とおつしやつて、少しお口になさつたのにつけても、たいそう感慨無量である。

撫子の花の色のようにいつ見ても美しいあなたを見ると、母親の行く方を

内大臣は尋ねられることだろうな。このことが厄介に思われるので、引き籠められているのをお気の毒に思い申しています。」

とおっしゃる。姫君は、ちよつと涙を流して、「山家の賤しい垣根に生えた撫子のような。わたしの母親など誰が尋ねたりしましうか。」

と人数にも入らないように謙遜してお答え申し上げなかつた様子は、なるほどたいそう優しく若々しい感じである。

「もし来なかつたならば」

とお口ずさみになって、ひとしお募るお心は、苦しいまでに、やはり我慢しきれなくお思いになる。

#### 「第六段 源氏、玉鬘への恋慕に苦惱」

お渡りになることも、あまり度重なつて、女房が不審にお思い申しそんな時は、気が咎め自制なつて、しかるべきご用を作り出して、お手紙の通わない時はない。ただこのお事だけがいつもお心に掛かっていた。

「どうして、このような不相応な恋をして、心の休まらない物思いをするのだらう。そんな苦しい物思いはするまいとして、心の赴くままにしたら、世間の人の非難を受ける軽々しさを、自分への悪評はそれはそれとして、この姫君のためにもお気の毒なことだらう。際限もなく愛しているからと言つても、春の上のご寵愛に並ぶほどには、わが心ながらありえまい」と思つていらつしやうた。「さて、そうしたわけで、それ以下の待遇では、どれほどのことがあるうか。自分だけは、誰よりも立派だが、世話する女君が大勢いる中で、あくせくするような末席にいたのでは、何の大したことがあるう。格別大したこともない大納言くらいの身分で、ただ姫君一人を妻とするのには、きつと及ばないことだらう。」

と、「ご自身お分りなので、たいそうお気の毒で、いつそ、兵部卿宮か、大将などに許してしまおうか。そうして自分も離れ、姫君も連れて行かれたら、諦めもつくだらうか。言つても始まらないことだが、そうもしてみようか」とお思いになる時もある。

しかし、お渡りになつて、ご器量を御覧になり、今ではお琴をお教え申

し上げなされることまで口実にして、近くに常に寄り添つていらつしやる。

姫君も、初めのうちこそ気味悪く嫌だとお思いであつたが、「このようになつても、穏やかなので、心配なお気持ちはないのだ」と、だんだん馴れてきて、そうひどくお嫌い申されず、何かの折のお返事も、親し過ぎない程度に取り交わし申し上げなして、御覧になるにしたがつてとても可愛らしさが増し、はなやかな美しさがお加わりになるので、やはり結婚させてすませられないとお思い返しなされる。

「それならばまた、結婚させて、ここに置いたまま大切にお世話して、適当な折々に、ごそりと会い、お話申して心を慰めることにしうか。このようにまだ結婚してないうちに、口説くことは面倒で、お気の毒であるが、自然と夫が手強くとも、男女の情が分るようになり、こちらがかわいそつだと思つ気持ちがなくて、熱心に口説いたならば、いくら人目が多くても差し障りはあるまい」とお考えになる、実にけしからぬ考えである。

ますます気が気でなくなり、なお恋し続けるといつのもつらいことである。ほどほどに思い諦めることが、何かにつけてできそうにないのが、世にも珍しく厄介なお二人の仲なのであつた。

#### 「第七段 玉鬘の噂」

内の大殿は、この新しい姫君のことを、お邸の人々も姫として認めず、軽んじた批評をし、世間でも馬鹿げたことと非難申している」と、お聞きになると、少将が、何かの機会に、太政大臣が、本当のことか」とお尋ねになつたことを、お話し申し上げると、

「いかにも。あちらでこそ、長年、噂にも立たなかつた賤しい娘を迎え取つて、大切にしているのだ。めつたに人の悪口をおっしゃらない大臣が、わたしの家のことは、聞き耳を立てて悪口をおっしゃるよ。それで、面目を施して晴れがましい気がする。」

とおっしゃる。少将が、

「あの西の対にお置きになつていらつしやる姫君は、たいそう申し分ない方だそうでございます。兵部卿宮などが、たいそうご熱心に苦心して求婚なさつていらつしやるか。けつして並大抵の姫君ではあるまいと、世間の

人々が推量しているようでございます」

と、お申し上げになると、

「さあ、それは、あの大臣の御姫君と思つ程度の評判の高さだ。人の心は、皆そういうものようだ。必ずしもそんなに優れてはいないだろう。人並みの身分であつたら、今までに評判になつていよう。」

惜しいことに、大臣が、何一つ欠点もなく、この世では過ぎた方でいらつしやるご信望やご様子でありながら、れっきとした奥方の腹に、姫君を大切に世話して、なるほど申し分あるまいと察せられる素晴らしい方がいらつしやらないとは。

だいたい子供の数が少なく、きつと心細いことだろうよ。妾腹であるが、明石の御許が生んだ娘は、あの通りまたとなひ運命に恵まれて、将来にきつと頼もしかろうと思われる。

あの新しい姫君は、ひよつとしたら、実の姫君ではあるまいよ。何といつても一癖も二癖もある方だから、大事にしていらつしやるのだろう」

と、悪口をおつしやる。

「ところで、どのようにお決めたのか。親王がうまく靡かせて自分のものになさるだろう。もともと格別にお仲がよいし、人物もご立派で婿君に相應しい間柄であるうよ」

などとおつしやつては、やはり、姫君のことが、残念でたまらない。あのように、勿体らしく扱つて、どういふふうになさる気かなどと、やきもきさせてやりたかつたものを」と癪なので、位が相当になつたと見えない限りは、結婚を許せないようにお思ひになるのであつた。

大臣などが、丁重に口添えして覆しなされるなら、それに負けたようにして承認しようと思つが、男君の方は、一向に焦りもなさらないので、おもしろからぬことであつた。

「第八段 内大臣、雲井雁を訪つ」

あれこれとご思案なさりながら、前ぶれもなく気軽にお渡りになつた。少将もお供しておいでになる。

姫君は、お昼寝をなさつていとるところである。羅の一重をお召しになつて

臥せつていらつしやる様子、暑苦しくは見えず、とてもかわいらしく小柄な身体つきである。透けて見える肌つきなどは、とてもかわいらしい手つきして、扇をお持ちになつたまま、腕を枕にして、投げ出されたお髻の具合、そう大して長く多いというのではないが、たいそう美しい裾の様子である。女房たちは物蔭で横になつて休んでいたので、すぐにはお目覚めにならない。扇をお鳴らしになると、何気なく見上げなかつた目つき、かわいらしげで、顔が赤くなつてゐるのも、親の目にはかわいく見えるばかりである。「うたた寝はいけないと注意申していたのに。どうして、ひどく無用心な恰好で寝ていらつしやつたのか。女房たちも近く伺候させないで、どうした」とか。

女性は、身を常に注意して守つてゐるのがよいのです。気を許して無造作なふうにしてゐるのは、品のないことです。

そうかといつて、ひどく利口そうに身を堅くして、不動尊の陀羅尼を讀んで、印を結んでゐるようなのも憎らしい。日頃接する人あまりよそよそしく、遠慮がすぎるのなども、上品なようなことはいつても、小憎らしくて、かわいらしげのないことです。

太政大臣が、お后候補の姫君にしつけていらつしやる教育は、何事でも一通りは心得ていて偏らず、特別目立つ特技もつけず、また不案内でうるうるすることもないようにと、余裕あるふうにとお考え置いていらつしやるという。

なるほど、もつともなことですが、人というものは、考えにも行動にも特に好き好む方面はどうしてもあるものだから、ご成長なさつた後に特徴も現れるでしょう。あの姫君が一人前になつて、入内させなされる時の様子が、とても見たいものだ」

などとおつしやつて、

「思い通りにお世話申そうと思つてゐた方面は、難しくなつてしまつたお身の上だが、何とか世間の物笑いにならないようにして差し上げようと、他人の身の上をあれこれと聞かたびに、心配しております。

試しにとばかり熱心なふりをする男の言葉を、ここしばらくはお聞き入れになつてはいけません。考えてゐることがございます」

などと、たいそうかわいく思いながら申し上げなされる。

「昔は、どのようなことも深くも考えないで、かえって、あの当座のつらい思いをした騒動にも、平気な顔をして父君にお会い申していたことよ」と、今になって思い出すと、胸が塞がってひどく、恥ずかしい。

大宮からも、いつも会えないことをお恨み申されるが、このようにおっしゃるのに遠慮されて、お出かけになってお目に掛かることがおできにされない。

## 第二章 近江君の物語 娘の処遇に苦慮する内大臣の物語

### 「第一段 内大臣、近江君の処遇に苦慮」

大臣は、この北の対の今姫君を、

「どうしたものか。よけいなことをして迎え取って。世間の人がこのように悪口を言うからといって、送り返したりするのも、まことに軽率で、氣遣いじみたことのようにだ。こうして置いているので、本当に大切にお世話する気があるのかと、他人が噂するのも癪だ。女御の御方などに宮仕えさせて、そうした笑い者にしてしまおう。女房たちがたいそう不細工だとけなしているらしい容貌も、そんなに言われるほどのものではない」

などとお思いになって、女御の君に、

「あの人を出させましよう。見ていられないようなことなどは、老いぼれた女房などをして、遠慮なく教えさせなさってお使いなさい。若い女房たちの噂の種になるような、笑い者にはなさないでください。それではあまりに軽率のようだ」

と、笑いながら申し上げなされる。

「どうして、そんなひどいことがございませう。中将などが、たいそうまたたく素晴らしいと吹聴したらしい前触れに及ばないというだけございませう。このようにお騒ぎになるので、きまり悪くお思いになるにつけ、一つには気後れしているのでございませう」

と、たいそうこちらが氣恥ずかしくなるような面持ちで申し上げなされる。この女御の様子、何もかも整っていて美しいというのではなく、た

いそう上品で澄ましていらつしやるが、やさしさがあって、美しい梅の花が咲き初めた朝のような感じがして、おつしやりたいことも差し控えて微笑んでいらつしやるのが、人とは違つ、と拝見なされる。

「中将が、何といつても、思慮が足りなく調査が不十分だったので」などと申し上げなされるが、お気の毒なお扱いであることよ。

### 「第二段 内大臣、近江君を訪う」

そのまま、この女御の御方を訪ねたついでに、ぶらぶらお歩きになって、お覗きになると、簾を高く押し出して、五節の君といって、氣の利いた若い女房がいるのと、双六を打つていらつしやる。手をしきりに揉んで、

「小費、小費」

と祈る声は、とても早口であるよ。ああ、情ない」とお思いになって、お供の人が先払いするのをも、手で制しなさつて、やはり、妻戸の細い隙間から、襖の開いているところをお覗き込みなされる。

この従姉妹も、同じく、興奮していて、

「お返しよ、お返しよ」

と、筒をひねり回して、なかなか振り出さない。心中に思っていることはあるのかも知れないが、たいそう軽薄な振舞をしている。

器量は親しみやすく、かわいらしい様子をしていて、髪は立派で、欠点はありません。額がひどく狭いのと、声の上つ調子なので台なしになっているようである。取り立てて良いというのではないが、他人だと抗弁することもできず、鏡に映る顔が似ていらつしやるので、まったく運命が恨めしく思われる。

「どうしていらつしやるのは、落ち着かず馴染めないのではありませんか。大変に忙しいばかりで、お訪ねできませんが」

とおつしやるのと、例によつて、とても早口で、こうして伺候してありますのは、何の心配がございませうか。長年、どんなお方かとお会いしたいとお思い申し上げておりましたお顔を、常に拝見できないのだけが、よい手を打たぬ時のようなじれつたい気が致します」

とお申し上げなされる。

「なるほど、身近に使う人もあまりいないので、側に置いていつも拝見して  
いようと、以前は思っていました。そのもできかねることでした。普通  
の宮仕人であれば、どうあるうとも、自然と立ち混じって、誰の目にも耳  
にも、必ずしもつかないものですか、安心していられます。それで  
あつてさえ、誰その娘、何がしの子と知られる身分となると、親兄弟の  
面目を潰す例が多いようだ。ましてや」

と言いかけてお止めになった、そのご立派さも分ならず、

「いえいえ、それは、大層に思いなさつて宮仕え致しましたら、窮屈でしょ  
う。大御大壺の係なりともお仕え致します」

とお答え申し上げるので、お堪えになることができず、ついお笑いになつ  
て、

「似つかわしくない役のようだ。このようにたまに会える親に孝行する気持  
ちがあるならば、その物をおっしゃる声を、少しゆっくりにしてお聞かせ  
下さい。そうすれば、寿命もきつと延びましょう」

と、おどけたところのある大臣なので、苦笑しながらおっしゃる。

### 「第三段 近江君の性情」

「舌の生まれつきなのでございましょう。子供でした時でさえ、亡くなつ  
た母君がいつも嫌がつて注意しておりました。妙法寺の別当の大徳が、産  
屋に詰めておりましたので、それにあやかつてしまつたと嘆いていらつし  
やいました。何とかしてこの早口は直しましょう」

と大変だと思つているのも、たいそう孝行心が深く、けなげだと思ひ  
になる。

「その、側近くまで入り込んだ大徳こそ、困つたものです。ただその人の前  
世で犯した罪の報いなのでしょう。唾とどもりは、法華経を悪く言つた罪  
の中にも、数えているよ」

とおっしゃつて、わが子ながらも気の引けるほどの御方に、お目に掛け  
るのは気が引ける。どのよう考えて、こんな変な人を調べもせず迎え取つ  
たのだらう」とお思ひになつて、女房たちが次々と見ては言い触らすだる  
う」と、考え直しなさるが、

「女御が里下りしていらつしやる時々には、お伺いして、女房たちの行儀作  
法を見習いなさい。特に優れたところのない人でも、自然と大勢の中に混  
じつて、その立場に立つと、いつか恰好もつくものです。そのような心積  
もりをして、お目通りなさつてはいかがですか」

とおっしゃると、

「とても嬉しいことございませぬ。ただただ、何としてでも、皆様方にお  
認めいただくことばかりを、寝ても覚めても、長年この願い以外のことは  
思つてもいませぬでした。お許しさえあれば、水を汲んで頭上に乗せて運  
びましても、お仕え致します」

と、たいそういい気になつて、一段と早口にしゃべるので、どうしよ  
もないと思ひになつて、

「そんなにまで、自分自身で薪をお拾いにならなくても、参上なさればよい  
でしょう。ただあのあやかつたという法師さえ離れたらばね」

と、冗談事に紛らわしておしまひになるのも氣づかずに、同じ大臣と申し  
上げる中でも、たいそう美しく堂々として、きらびやかな感じがして、並々  
の人では顔を合わせにくい程立派な方とも分ならず、

「それでは、いつ女御殿の許に参上するといたしましょう」

とお尋ね申すので、

「吉田などと言つのが良いでしょう。いや何、大げさにすることはない。そ  
のようにお思ひならば、今日にでも」

と、お言い捨てになつて、お渡りになつた。

### 「第四段 近江君、血筋を誇りに思う」

立派な四位五位たちが、うやうやしくお供申し上げて、ちよつとどこかへ  
お出ましになるにも、たいそう堂々とした御威勢なのを、お見送り申し上  
げて、

「何と、まあ、ご立派なお父様ですわ。このような方の子供でありながら、賤  
しい小さい家で育つたこととは」

とおっしゃる。五節は、

「あまり立派過ぎて、こちらが恥ずかしくなる方でいらつしやいますわ。相応

な親で、大切にしてくれる方に、捜し出しされなかつたならよかつたのに」「  
と言つのも、無理な話である。

「いつもの、あなたが、わたしの言うことをぶちこわしなかつて、心外だ  
わ。今は、友達みたいな口をきかないでよ。将来のある身の上なのようで  
すから」

と、腹をお立てになる顔つきが、親しみがあつて、かわいらしくて、ふざ  
けたところは、それなりに美しく大目に見られた。

ただひどい田舎で、賤しい下人の中でお育ちになつていたので、物の言  
い方も知らない。大したことのない話でも、声をゆつくりと静かな調子で  
言い出したのは、ふと聞き耳でも、格別に思われ、おもしろくない歌語り  
をするのも、声の調子がしっくりして、先が聞きたくなり、歌の初め  
と終わりとをはつきり聞かえないように口ずさむのは、深い内容までは理  
解しないまでも、ちよつと聞いたところでは、おもしろそうだと、聞き耳  
を立てるものである。

たとえまことに深い内容の趣向ある話をしたとしても、相当な嗜みがあ  
るとも聞かせるはずもない、うわづつた声づかいをしておっしゃる言葉は  
ごつごつして、訛があつて、気ままに威張りちらした乳母に今も馴れきつ  
ているふうに、態度がたいそう不作法なので、悪く聞かせるのであつた。  
まづたくお話にならないというのではないが、三十一文字の、上句と下  
句との意味が通じない歌を、早口で続けざまに作つたりなさる。

#### 「第五段 近江君の手紙」

「ところで、女御様に参上せよとおっしゃつたのを、しぶるように見えた  
ら、不快にお思ひになるでしょう。夜になつたら参上しましょう。大臣の  
君が、世界一大切に思つてくださつても、ご姉妹の方々が冷たくなつた  
ら、お邸の中には居られまじょうか」

とおっしゃる。ご声望のほどは、たいそう軽いことであるよ。  
さうそくお手紙を差し上げなさる。

「お側近くにおりながら、今までお伺いする幸せを得ませんのは、来るなど  
関所をお設けになつたのでしょうか。お目にかかつてはいませんのに、お

血続きの者ですと申し上げるのは、恐れ多いことですが。まことに失礼な  
がら、失礼ながら」

と、点ばかり多い書き方で、その裏には、  
「実は、今晚にも参上しようと思つて存じますのは、お厭いになるとかえつて思ひ  
が募るのでしょうか。いいえ、いいえ、見苦しい字は大目に見ていただき  
たく」

とあつて、また端の方に、このように、

「未熟者ですが、いかがでしょうかと 何とかしてお目にかかりとうござい  
ます 並一通りの思いではございません」

と、青い色紙一重ねに、たいそう草仮名がちの、角張つた筆跡で、誰の書  
風を継ぐとも分らない、ふらふらした書き方も下長で、むやみに気取つ  
ているようである。行の具合は、端に行くほど曲がつて来て、倒れそうに  
見えるのを、につこりしながら見て、それでもたいそう細く小さく巻き結  
んで、撫子の花に付けてあつた。

#### 「第六段 女御の返事」

桶洗童は、たいそうもの馴れた態度できれいな子で、新参者なのであつ  
た。女御の御方の台盤所に寄つて、

「これを差し上げてください」と言う。下仕えが顔を知つていて、

「北の対に仕えている童だわ」

と云つて、お手紙を受け取る。大輔の君というのが、持参して、開いて  
御覧に入れる。

女御が、苦笑してお置きあそばしたのを、中納言の君という者が、お近  
くにいて、横目でちらちらと見た。

「たいそうしゃれたお手紙のようでございますね」

と、見たそうにしているのだ。

「草仮名の文字は、読めないからかしら、歌の意味が続かないように見え  
ます」

とおっしゃつて、お下しになつた。

「お返事は、このように由緒ありげに書かなかつたら、なつていないと軽蔑

されましよう。そのままお書きなさい」

と、お任せになる。そう露骨に現しはしないが、若い女房たちは、何ともおかしくて、皆笑ってしまった。お返事を催促するので、

「風流な引歌ばかり使ってございますので、お返事が難しゅうございます。代筆めいては、お気の毒でしよう」

と言つて、まるで、女御の「筆跡のように書く。

「お近くにいらつしやるのにその甲斐なく、お目にかかれないのは、恨めしく存じられます。常陸にある駿河の海の須磨の浦に お出かけください、箱崎の松が待っています」

と書いて、読んでお聞かせす申すと、

「まあ、困りますわ。ほんとうにわたしが書いたのだと言つたらどうしましよ」

と、迷惑そうに思つていらつしやつたが、

「それは聞く人がお分かりでございましょう」

と言つて、紙に包んで使いにやった。

御方が見て、

「しゃれたお歌ですこと。待っているとおっしゃっているわ」

と言つて、たいそう甘つたるい薫物の香を、何度も何度も着物にた焚きしめていらつしやつた。紅というものを、たいそう赤く付けて、髪を梳いて化粧なさつたのは、それなりに派手で愛嬌があつた。ご対面の時、さぞ出過ぎたこともあつたであらう。